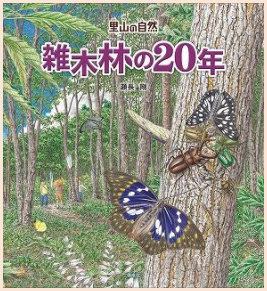
【緑地を楽しむ本】

『雑木林の 20 年　里山の自然』

瀬長剛　著　　偕成社



春・芽吹きの季節、雑木林は木々の芽吹きやこの時期にしか現れない虫や花々で賑わい始めました。この本では夏や秋、冬と雑木林の同じ場所で、そこに生える植物や木々に来る虫たち、鳥たちをていねいにえがいています。早春には花が咲いていたシュンランも夏には実をつけます。銀緑色のビロードのように小さかったコナラの葉も夏には青々としてオトシブミが揺籃を作りますが、冬にはすっかり枯れ落ちます。小さな雑木林ですが、季節によって訪れる虫や鳥たちも変わります、なんと多くの生き物がこの場所を利用しているのでしょう。どれも珍しいという種ではなく、私たちのすぐそばで生きている生きものたちです。

あれ、でもこれでは雑木林の 1 年ではないの？と疑問に思った頃、場面は変わって、この雑木林は伐採されます。あんなにすばらしかった世界を・・・と惜しむ必要はありません。これは里山で昔から行われていたこと。伐採後明るくなった斜面に咲く花々、ひこばえが成長する様子など、時を追ってどのように移り変わっていくか、これもていねいに描かれています。伐採してから 20 年、雑木林は見事に以前と同じ多様性に富んだ森に戻りました。伐採することが雑木林を若返らせているのですね。

もちろん、人は雑木林を伐採してそのままにしているのではありません。伐採した木で薪や炭を作り、下草刈りや枝打ちをして山が健全に育つお手伝いをしているのです。里山は人々の生活と密接に関わっていました・・・が、今その関係が危うくなってきています。

そうだ！私たちがやっている緑地活動はささやかだけど、この雑木林の豊かな自然を守り、多様な生きものの住む場を保証することだったのだ・・・堆肥の中に眠る幾十ものカブトムシの幼虫に思いを馳せ、心が躍りました。

（小川）